

## [報告] 唐丹の津波石の捏造者は込山英松

一般社団法人共同通信社写真データ部嘱託\* 沼田 清

Hidematsu Komiya fabricated the Toni tsunami stone

Kiyoshi Numata

Photo data section, Kyodo News Organization, 1-7-1 Higashi-Shimbashi, Minato-ku,  
Tokyo, 105-7201 Japan

Fumio Yamashita (2001) mentioned that the photograph of “the Toni tsunami stone” reported as a tsunami stone derived by the 1896 Meiji Sanriku Earthquake is not a real tsunami stone, but “the Tsuzuki-ishi” legendary linked a warrior monk Mushashibo Benkei. He also concluded the first fabricating report was made by the Tokyo Asahi Simbun (Yamashita, 2002). But, Jiro Tomari (2002) rebutted to the Yamashita’s views. The truth had been disputable until the authors presentation in the 34<sup>th</sup> annual meeting of the Society of Historical Earthquake Studies on 16, September, 2017. The author researched the same age documents to make clear the first forger, and found out a copy of the Chuo Shimbun, in which Hidemastu Komiya described the fabricated Tsunami stone, that dated 11 days before Asahi Simbun’s report. After cross-checking these documents, I came to the conclusion that cameraman Hidematsu Komiya was the culprit in the fabrication.

Keywords: Tsunami-ishi, forgery, Komiya.

### §1. はじめに

本誌第 17 号で山下文男は、1896 年 6 月 15 日に発生した明治三陸津波の報道における岩手県「唐丹の津波石」写真(図 1, 4)は捏造であり、正しくは同県遠野の山中の「弁慶の続石」だったと報告した[山下(2001)]. さらに第 18 号[山下(2002)]で、捏造は「最初に報道した東京朝日新聞によるもの」と断定し、論難した. 同号には朝日の泊次郎編集委員の反論も掲載された[泊(2002)]. しかしどちらも決め手を欠いた印象で、読者には不消化感が残った.

筆者は 2013 年にこの津波石捏造論争を知り、津波発生当時の報道記事を点検して、東京朝日新聞よりも 11 日早く同一図柄の版画を掲載した中央新聞など、二人の論議に登場していない資料を幾つか見出した. それらを照合した結果、捏造はペンキ美術畫絵師の込山英松によるものとの判断に至った.

### §2. 朝日より早く中央新聞が掲載

山下(2002)は専ら、1896 年 7 月 15 日発行の東京朝日新聞別刷り付録・『三陸東海岸大海嘯被害図』[東京朝日新聞(1896)](図 1, 6), 同 25 日発行の文芸倶楽部増刊号・『海嘯義捐小説』[博文館(1896b)]と風俗画報・『大海嘯被害録』[東陽堂(1896)](図 5)の三つを基に議論を進めた.

しかし『東京朝日新聞』より 11 日早い 7 月 4 日付『中央新聞』[中央新聞(1896a)]が「唐丹海角の森林中に打揚げし巨石(原写真はペンキ美術畫絵師込山英松氏寄贈)」と題して同一図柄の津波石の版画を掲載していた(図 2). 翌 5 日には『萬朝報』[萬朝報

(1896a)]も同様の版画を掲載した.



図 1 『東京朝日新聞』が 1896 年 7 月 15 日に別刷り付録で掲載した唐丹の津波石写真

Fig. 1 The picture of Tsunami-stone in Toni that Tokyo Asahi Newspaper carried on July 15 in 1896

さらにいえば、込山の写真は『海嘯義捐小説』より前に、同じ博文館の雑誌『太陽』7 月 20 日号[博文館(1896a)]の岩手県ルポで掲載済みであった. ちなみに『太陽』は 7 月 5 日号の大橋乙羽の宮城県ルポを皮切りに、8 月 5 日号(江原竹次郎の宮城県ルポ)まで 3 号にわたって三陸津波の被災状況写真計 67 枚を巻頭に掲載していることは踏まえておきたい.

『中央新聞』が『東京朝日新聞』より早く津波石を掲載したことが判明して、「では捏造は『中央新聞』のやったこと」とするのは早計だ. 三陸沿岸には計 60 人

\* 〒105-7201 東京都港区東新橋 1-7-1

を超える記者、写真師、画工が取材に入ったが、込山以外に誰からもこの津波石の報告は上がっていない。岩手県の地元紙『岩手公報』にも全く見当たらない。



図2 中央新聞が1896年7月4日に掲載した唐丹の津波石の版画  
 Fig. 2 The block print of Tsunami-stone in Toni that Chuo Newspaper carried on July 4 in 1896

あらためて『太陽』7月20日号と『海嘯義捐小説』の写真解説の項を読むと、編集者の乙羽が「今予が君に聴ける所の写真の解説を左に略記す」と書いており、虚報の発信者が込山であることは明らかだ。



図3 岩手県遠野市の山中にある弁慶の続石  
 (2017年5月筆者撮影)  
 Fig. 3 Tsuzuki stone of Musashibo Benkei in the mountain of Tono city Iwate Pref. taken in May 2017

### §3. 込山英松とは何者か

偽りの説明を真に受けた乙羽と新聞3紙の担当者は不注意のそしりを免れないが、辣腕編集者らを手玉に取った込山英松とはどういう人物であろうか？

#### 3.1 込山の動き

津波発生を知り込山が動き出したのは6月20日ごろと思われる。当時の『萬朝報』によると、25日夜には

大船渡盛町の「山清」旅館に投宿していた。『釜石臨時救恤事務所日誌』の27日の項に「災害の状況写取の為め釜石に来る」の記述がある(ただし名前は「込山英吉」となっている)。撮影地点を地図上でたどると、高田から小友、広田、大船渡(盛)、綾里、甫嶺、唐丹と北上し、釜石に入り、撮影終了後、日本鉄道奥州線(後の東北線)の花巻駅へ向かう途次、遠野で弁慶の続石を撮影したのだろう。帰京は7月1日である。



図4 雑誌『太陽』1896年7月20日号掲載の唐丹の津波石写真  
 Fig. 4 The picture of Tsunami-stone in Toni that Taiyo magazine carried on the issue of July 20 in 1896



図5 雑誌風俗画報の1896年7月25日臨時増刊・『大海嘯被害録』に掲載した唐丹の津波石の版画  
 Fig. 5 The block print of Tsunami-stone in Toni that special issue of Huzoku-Gaho magazine carried on July 25 in 1896

#### 3.2 大橋乙羽の込山評

『太陽』で乙羽は込山を次のように評している。「惨また惨、虐また虐、岩手県の被害は実に名状すべからず、文の之を伝ふべきなく畫の之を報ずべきなし、写真の術やや現実を描き出して惻々人を動かさしむるも、美に傾きて見る人の同情を惹く淡きを奈何せむ、そが就中尤も真に尤も精なる写真を共栄廣告

社主込山英松君の撮影に係るものとす。

君は浅草蔵前南元町廿六番地に住み、ペンキ美術畫を業とせり、今回海嘯の変あるや直ちに釜石附近に赴き十数葉の撮影あり、その中の十二葉(筆者注:実際には十三葉)を君に請ひ得てここに之を太陽紙上に載す]

込山の写真は東京朝日新聞の附録[東京朝日新聞(1896)]にも5枚使われ、さらに幻燈にもなって仙台市博物館に種板が5枚残っている。写真師としての技量は乙羽が一目置くほどだった。だが幕末から昭和までの写真関係者名簿『日本写真界の物故功労者顕彰録』[日本写真協会(1952)]にその名はない。

### 3.3 武者金吉の込山評

歴史地震研究の先達、武者金吉が、地震学会誌の『地鯨居士雑筆』[武者金吉(1939)]に「込山英松撮影の三陸津浪寫眞」と題して、その人となりを次のように記している。

「(前略)この込山英松と云ふのは筆者が半生を過ごした家の1軒おいた隣家であったので良く知って居るが上記の説明にもある通り職業は看板屋で本職は写真屋ではないのである。(中略)才気とヤマ氣に富み、町内では相当幅を利かせていたようである。(中略)彼の撮影にかかる写真を注意して見ると“共榮廣告社寫”といふ札を掲げてあるのを認められるであろうが、これは彼が看板屋と広告屋を兼ねて居たからである。

兎に角写真が今日の如く普及して居なかつた當時、交通極めて不便であつた當時に、逸速く罹災地に出張して其の惨状をカメラに収めて呉れた彼の機敏なる行動を我々は多ししなければならぬやふに思ふのである。実際その時代に写真機を所有し撮影の技術を心得て居たと云ふ事は驚嘆すべき事実なのである。(中略)

彼が遙々岩手県に赴いた目的は津波の調査でなかつたことは云ふまでもないが、さりとて単なる趣味道楽とも考え難い、金儲か売名か、その両方を兼ねていたと云うのが事実に近いのではあるまいか]

津波石写真への言及こそないが、この人物評は的確である。とくに「才気とヤマ氣に富み」とは本質を突いているのではないか。込山は広告屋であつて報道者ではない。報道倫理とは無縁であつたから、こんな悪戯ができたのだろう。

### §4. 黎明期だった新聞の写真印刷

明治三陸津波の報道では、発生から12日後の6月27日以降、『東京日日新聞』、『萬朝報』、『報知新聞』、『時事新報』、『中央新聞』などに「摸写真」とうたった版面が連日登場している。版面での掲載となつたのは、当時の新聞印刷技術が黎明期で、輪転機ではまだ本紙に網目版の写真印刷ができなかつたため

だ[佐藤振寿(1980)]。

そんな中で『東京朝日新聞』が出した写真特集は、平台印刷(枚葉刷り)による見開き2ページ大に岩手・宮城両県の惨状写真23枚を収容した別刷り付録であつた(図6)。製版と印刷を請け負つたのは米国帰りの写真製版の第一人者、小川一真である。岩手県の被災写真では『太陽』よりも5日早く報じた[朝日新聞社(1990)]。なお、現物が確認できていないが、『中央新聞』[中央新聞(1896b)]と『報知新聞』[報知新聞(1896b)]もそれぞれ6月30日付と7月1日付で別刷り写真付録の社告を打っている。

### §5. 捏造判明までに100年

#### 5.1 きっかけは山下の百周年記念冊子

山下が唐丹津波石は捏造だつたと知つたのは、明治三陸津波百周年記念で1995年6月に発行した『写真と絵で見る明治三陸大津波』の冊子がきっかけとなつた[山下(2001)]。これを紹介した岩手の地元紙『東海新報』を見た読者からの指摘であつた。

沼田がこの件について2017年歴史地震研究会大会で発表した際、「捏造がなぜ100年もばれなかつたのか?」と質問があつた。考えられるのは、弁慶の続石の存在を知つていて、なおかつ東京朝日新聞の付録や『太陽』、『海嘯義捐小説』などを目にする事ができた人は皆無に近かつたためかもしれない。わずかにいたとしても、新聞社や出版社に異議を唱えるまでに至らなかつたのではないか。

#### 5.2 海嘯地特派員談話会を開催

実は込山は帰京後、津波取材に携わつた在京の各社記者らに呼び掛け、海嘯地特派員談話会を7月19日に入谷町の松源分店で開催した。その模様を21日の『萬朝報』、『東京日日』、『都新聞』が報じている。参加者50余名。各被災地の実況報告の後、歌舞音曲が入り、食事を挟んで夜には「三陸海嘯の幻燈を催し込山氏一々之が説明をなしたり」云々。津波石の写真も披露されたに違いない。

今は確かめようがないが、集まつた記者と写真師ら、とりわけ唐丹周辺を踏査した者の中で、込山の津波石写真の怪しさに気づき問いただす人はいなかつたのだろうか?疑問は残る。

### §6. おわりに

込山は実にユニークで人間的興味を募らせる人物だ。だが彼の一連の写真の原プリントは見つかつていない。写真史の面からも貴重なので、探索を続けたい。

武者が込山に関し「下らぬ事で貴重な紙面を潰すのは恐縮であるが、筆者が書残して置かないと誰も之を傳へる人が無さ相だから敢て紙面を汚した次第である」と結んだのは、今日の事態を予測したように

響く。

津波石の捏造の指摘を受け、時間をかけて精査し公表したのは山下文男氏の学問的誠実さであり、敬意を表したい。しかし山下氏は2011年3月11日の東日本大震災で被災し、その年の暮れに亡くなられた。

捏造論議の一方の当事者、朝日新聞の泊次郎氏はその後定年退職したが、調査結果をお伝えしたところ喜んで下さった。氏はその後も山下氏と交友が続いたようで、「この事実をお伝えできないのは残念です」と語っておられた。

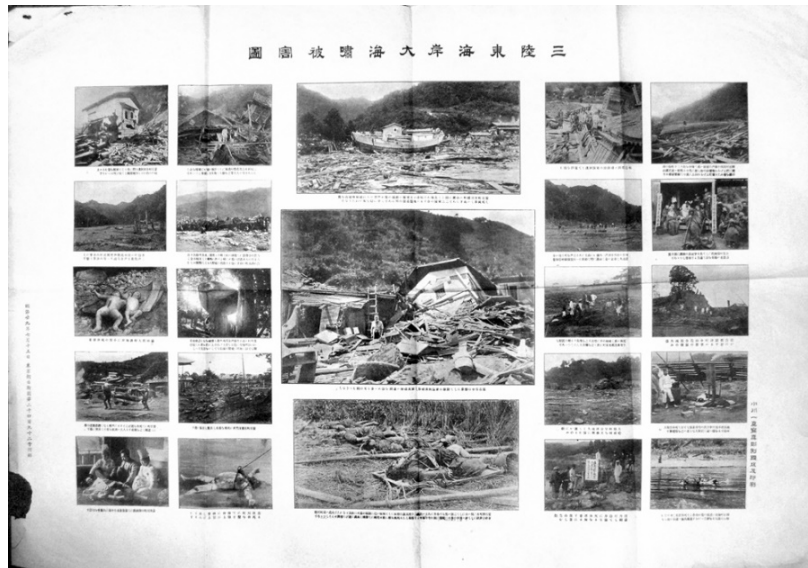


図6 東京朝日新聞が1896年7月15日に発行した『三陸東海岸大海嘯被害図』。  
唐丹の津波石写真は左から2列目の中央（東京都慰霊協会蔵）

Fig. 6 The extra issue of photo reportage on Meiji Sanriku Tsunami by Tokyo Asahi Shimbun on July 15 1896 (owned by Tokyo Memorial Hall)

### 文献

山下文男, 2001, 明治三陸津波(1896年)に関する一部捏造された史料について, 歴史地震 17, 148-155.

山下文男, 2002, 「捏造津波石」問題始末, 歴史地震 18, 177-180.

東京朝日新聞, 1896年7月15日付録三陸東海岸大海嘯被害図.

東陽堂, 1896年7月25日, 風俗画報臨時増刊大海嘯被害録.

博文館, 1896a, 太陽7月20日号, 巻頭グラビア

博文館, 1896b, 文芸倶楽部臨時増刊7月25日号  
海嘯義捐小説.

中央新聞, 1896a, 7月4日, 津波石版画.

萬朝報, 1896a, 7月5日, 津波石版画.

日本写真協会, 1952, 日本写真界の物故功労者顕彰録.

巖手県南・西閉伊郡役所, 1897, 巖手県陸中国南

閉伊郡海嘯記事, 釜石臨時救恤事務所日誌, 88.

武者金吉, 1939, 地鯰居士雑筆, 地震学会誌 11, 2, 85-86.

東京日日新聞, 1896, 6月27日, 広田村惨状版画.  
報知新聞, 1896a, 1896, 6月27日, 釜石石應寺惨状版画.

時事新報, 1896, 1896, 6月27日, 鉾ヶ崎惨状版画.

朝日新聞社, 1990, 相次ぐ天災・三陸津波の惨害, 朝日新聞社史明治編 330-332.

佐藤振寿, 1980. 9 新聞写真の軌跡(3), カメラ毎日 27, 9, 188-191, 毎日新聞社.

山下文男, 1995, 写真と絵で見る明治三陸大津波(自費出版)18.

中央新聞, 1896b, 6月28日社告「海嘯地写真付録」

報知新聞, 1896b, 6月25日社告「海嘯地被害地の写真」